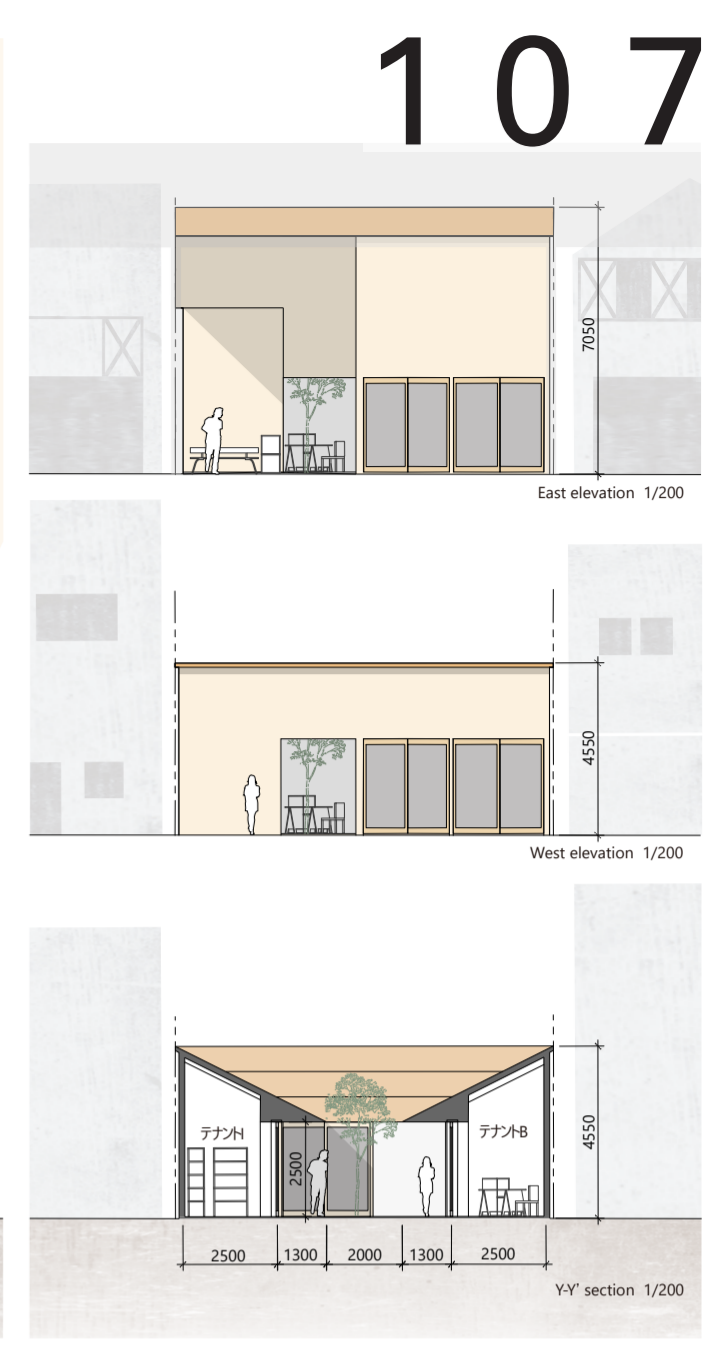
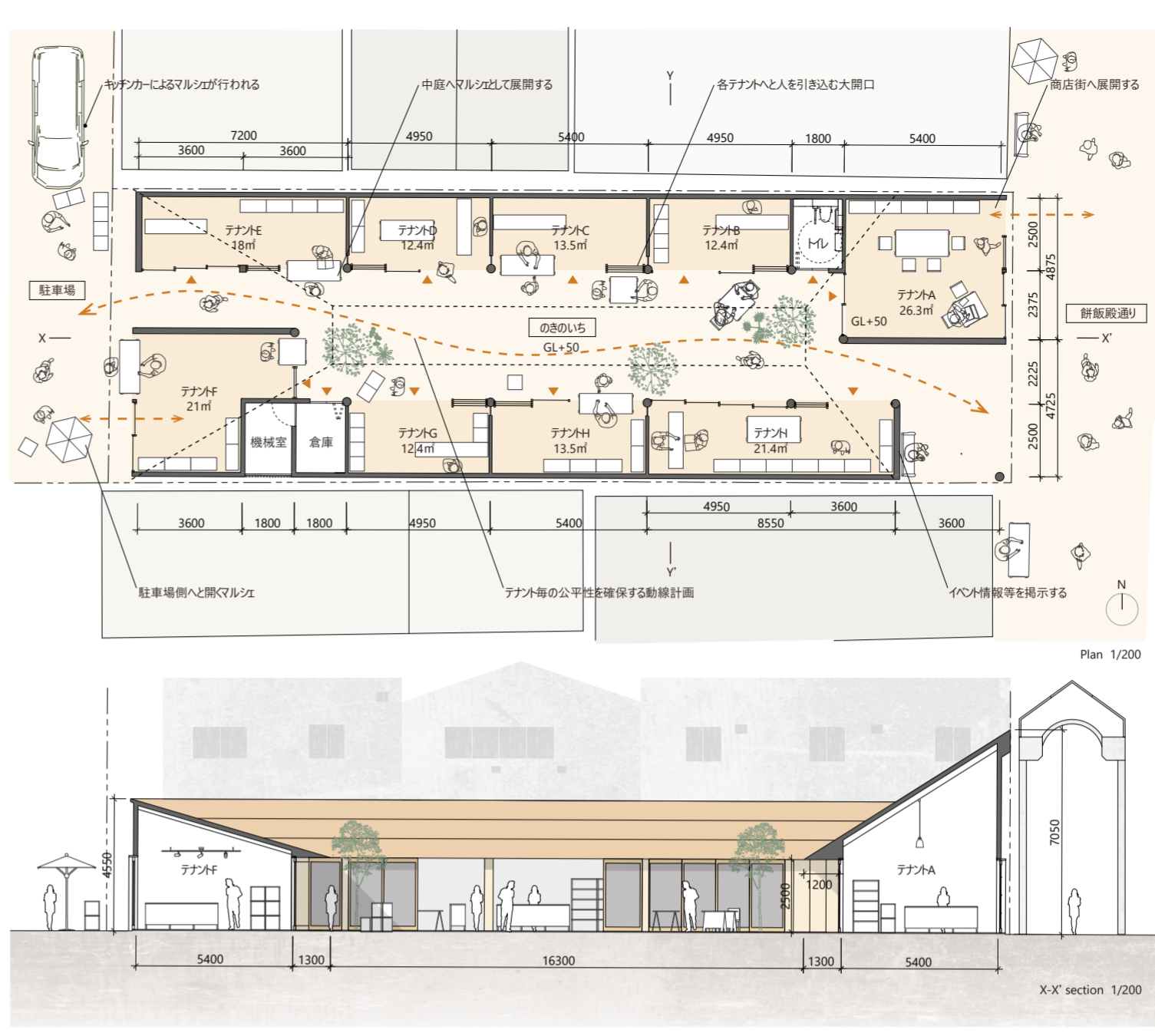




のきのいち



商店街からのきのいちを見る。施設の前庭もマルシェのスペースとして使用できる。



空の抜けた明るい場所、人々の活動が奥に見え、商店街を歩く人々と自然と中へ導く。



テナントから'のきのいち'を見る。4枚引き戸を開めることで一般のお店のような使い方もできるが、開放することで外と連続する使い方が可能。

郷の文化を未来に受け継ぐ

平城京が長岡京へ遷都されたのち、奈良は寺の都として興福寺・東大寺を中心に門前郷と呼ばれるまちを形成していきました。各郷内では市を中心とした商活動によって経済性を高めていき、周りに新たな郷が生まれていったと言われており、現代の奈良にも生業・商売が成り立つ職住一体・職住近接の町としての性格が受け継がれています。本プロジェクトでは、奈良町の経済活動の歴史的原点ともいえる市=[マルシェ]をコンセプトに掲げ、敷地内のみでの活動にとどまらず、地域を巻き込みながらまち全体を活性化させていく触媒となるような施設を目指します。



つながりを生み出す'のきのいち'

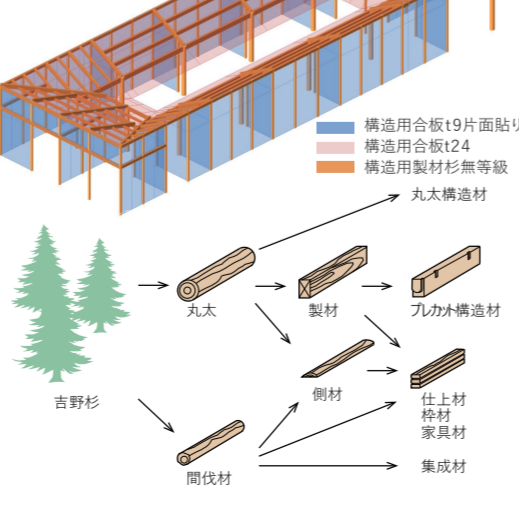
テナントをすべて中心にある'のきのいち'に向けて配置することで、テナント間のヨコのつながりを生み出す構成としています。晴れた日には、ガラスの4枚引き戸を開放して、各テナントに限られた内部のスペースを軒下まで拡張したマルシェ形式での使用方も想定しています。そうして生まれる賑わいの空間は、用事のない人も立ち寄りやすく、買い物だけでなく、休憩する、お店の人とおしゃべりする等、様々な活動の場となります。まちの祭事の際には、その賑わいを、餅餅殿商店街、西側駐車場にも派生させることで、まちと緩やかにつながる空間を創り出します。また、設計・工事監理期間中商店街会員の皆様とマルシェについて考えるWSを定期開催することで、オープン時からのスムーズな運用を目指します。



かつて奈良の郷がその範囲を市により広げていったように、周辺のインキュベーション施設と連携し、マルシェを定期的開催するなど、敷地内だけにとどまらない、町全体を意識した活動の拠点となります。

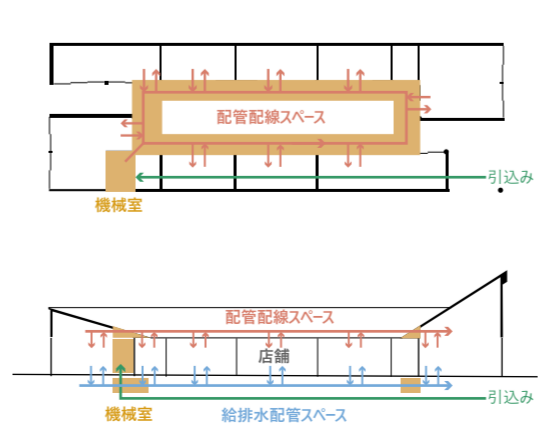
地産の木材を用いた構造

・構造種別は木造、架構形式は在来軸組構法とします。部材寸法を汎用部材断面に抑え、反復の多いシンプルな架構とすることで、地産材(県内の森林資源)を積極的に使用でき、コストカットを目指す計画としています。
・延焼の範囲にかかる'のきのいち'周りの構造柱は、燃えしろ設計とし、丸太材φ300を用いた表しとします。
・地産の木材を使うメリットを生かし、材木店、工務店、プレカット業者と協力、購入した材の使用経路最適化、端材の最小化を目指します。



フレキシブルな設備計画

・共用部から容易にアクセスできる位置に各テナントのメーター、室外機等をまとめて設置する機械室(外部)を設け、意匠的にも室外機や設備機器が公共部に露出することないよう配慮しています。
・本工事で予定されている、一次側工事は、'のきのいち'床下に設け、機械室まで引き込み計画とします。
・2次側の配管配線スペース(各テナント内装工事)として、'のきのいち'上部に軒裏空間を造作し、各機器と外部を接続する計画とします。また、給排水設備については、メンテナンス性に配慮し、排水管範囲の床下を嵩上げすることで簡易ビット化を行い、テナントの変更による、将来的な機器の刷新や変更にも柔軟に対応できる計画としています。



交流を育む日本らしい趣のある灯り

日中は自然光が降り注ぐ'のきのいち'が特徴的な本計画。夜間は表情がガラリと変わり、ろうそくのようなオレンジ色の照明が軒先を彩り、日本らしい趣のある賑わいを演出します。店内は太陽光の白い光とも、ろうそくのオレンジの光とも相性が良い、中間的な温白色の光を基調として、昼夜とも調和のとれた空間をつくり出します。マルシェやイベント時には小さなキャンドルを用いたワークショップを'のきのいち'に飾ることで、地域の交流も生まれ、この場所だけの景色をつくり出すことができます。



鳥瞰バース 商店街からの人の新しい流れを作り出す。'のきのいち'は、幅4.5mであり、滞留空間としても機能する。

